

## &lt;前回：シュライアマハーとヘーゲル&gt;

## (1) 問題

1. ベルリン大学でお互いに意識し合った二人の思想家。
2. 近代において分裂しつつある諸伝統を総合する試み。総合の思想家  
ティリッヒ：シュライアマハー＝「古典的な神学的総合」、ヘーゲル＝「普遍的総合」  
「シュライエルマッハーは、神学の立場からの偉大な総合である。十九世紀の初め、ベルリン大学で彼の同僚だったヘーゲルは、哲学の領域における総合の成就であった」、「シュライエルマッハーとヘーゲル両者の総合の挫折後に、再び総合を試みなければならない」(『ティリッヒ著作集・別巻三』(キリスト教思想史II、宗教改革から現代まで)白水社、154、125頁)。
3. 「シュライアマハー＝神学者、ヘーゲル＝哲学者」といった単純な図式は成り立たない。  
哲学的解釈学の父としてのシュライアマハーと三位一体論の思想家としてのヘーゲルなど。

## (2) シュライアマハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)

4. シュライアマハーとはいかなる思想家か
  - ①近代プロテスタント神学の父：啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合  
同時に、近代的な宗教研究の広範な領域に対して、その起点となった。
  - ②啓蒙思想とロマン主義の総合  
カント・フィヒテ → ロマン主義運動 → 体系構想(神学－哲学)  
ヘルンフォート兄弟団 1796 1811  
ハレ大学神学部(宗教的懐疑) ベルリン、ベルリン大学神学部  
1787(19) 『宗教論』(Reden)・『モノローゲン』
  - ③解釈学・弁証法・倫理学、体系家 → 信仰論(『信仰論』(Glaubenslehre))の影響  
Dogmatik から Glaubenslehre へ  
・人間性における宗教 → 弁証神学、宗教の本質概念(本質論から現象論へ)  
・実定性 → 個別的で歴史的な諸宗教への定位 cf. 理神論  
高次の實在論、説教者  
↓  
体系的哲学構想(『弁証法』)に裏打ちされた宗教論、方法論としての解釈学の構築
5. 『宗教論』の信仰概念
6. 形而上学・倫理学との区別
7. 『信仰論』の意義：教義学の新しいスタイル、自由主義神学
  - ・経験から教義へ
  - ・諸学の体系内における神学の位置づけの明確化  
倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題から神学本論へ
8. 『信仰論』序説(Einleitung)
9. シュライアマハーの議論のアウトライン  
「教義学・教義→教会・信仰共同体→敬虔さ→感情・直接的自己意識→絶対的依存感情」  
ある(神の定義)。
10. 弁証法：対話における思惟の形成＝解釈学的。  
伊藤慶郎『シュライアマハーの対話的思考と神認識——もうひとつの弁証法』から。
  - ・「弁証法」の基本構造(「第一部超越的部門」を中心に)：
  - ・知は一人の人間の思考によって獲得されるものではなく、他者との思想の交換という対話的思考においてのみ接近可能である。「ドイツ観念論よりむしろハーバマスの「コミュニケーション行為論」と平行関係」が確認できる。対話者の「合意」による「共通の世界」の成立、つまり、「対話遂行という言葉を紹介した他者とのコミュニケーション」(「主観間相互の一致」)における私たちの世界の形成は、確かにハーバマスの真理の合意説と近接

する。

### (3) ヘーゲル哲学

11. 「わたしがこれまで示唆してきたことは、ヘーゲルの思惟の本質的なものを理解するためには二つの現実的な根、つまり宗教的な根と政治的な根が重要である、ということなのである」(Tillich,1931/32, S.109)。
13. 三位一体論は、19世紀のキリスト教神学(自由主義神学)においてよりも、むしろヘーゲル哲学において保持された。→ヘーゲル哲学のキリスト教思想としての意義。  
cf. シュライアマハー『信仰論』における三位一体論の位置
14. ヘーゲル自身が直面した歴史的な現実状況。30年戦争の帰結と啓蒙主義の登場に規定されたドイツの宗教的あるいは政治的な分裂状況  
宗教：正統主義の国家宗教と啓蒙化された個人宗教との対立  
政治：半封建的な生活形態の下で絶対主義的国家と国家宗教に支配されている大衆と啓蒙的な精神的自律性を要求する教養市民層という二つの社会階層間の分裂。統一国家の不在。
15. ヘーゲルの思想的課題：「啓蒙の土台の上に新しい民族文化」(ibid.,S.64)を建設することであり一民族の教育(Volkserziehung)、また「批判的理性の自律によって規定された時代と精神状況における宗教的な現実化」(ibid.,S.110)の問いに対して答えること。  
↓
  - ・分裂状況を克服。ヘーゲルの思想的営みは分裂し対立に陥った諸要素の総合(普遍的総合)の試み。ヘーゲル哲学を規定しているカイロス
  - ・ヘーゲル哲学の魅力あるいは意義
    - ・歴史意識に合致した包括的な論理体系(一貫性と包括性)
    - ・伝統を統合し歴史を説明する能力、多産性
16. ヘーゲル：絶対精神の自己実現と英雄。理性の狡知。→歴史における宗教
17. 歴史の具体的な状況から原理へ。  
歴史の個々の現象を歴史の表層に現れた偶然の出来事として論じるのではなく、こうした諸現象を規定する原理へと問題を掘り下げてゆくこと。啓蒙主義の登場によって鮮明になった分裂・対立の状況を、歴史を貫く動的な原理の問題として追求する態度。
18. 近代ドイツの運命を規定する原理  
アブラハムを典型(人間的可能性の型・モデル)とするユダヤ教の精神=対立の原理。
19. 対立の原理と分裂の克服
  - ・近代ドイツの政治的宗教的な分裂状況の問題→歴史を規定する原理の問題  
→対立の原理と同一性の原理の問題
  - ・近代ドイツの状況を規定する対立の原理(das Prinzip der Entgegensetzung)  
哲学：啓蒙思想あるいはカント哲学の二元論  
宗教的生：ユダヤ教の精神とその典型としてのアブラハム
21. 自然に対する巨大な不信・敵意・蔑視の態度 → 故郷を喪失し世界に離散するというユダヤ民族の運命 → 敵対的な自然を征服し自らのみを神の選民とする態度  
アブラハムにおいて出現したユダヤ教の精神は、キリスト教と後期ローマを経由して、ドイツ民族の運命になった。
22. 歴史的な分裂の克服も、原理のレベルから、つまり同一性の原理において論じられねばならない。  
ヘーゲル：受肉論において具体化された同一性の原理(ヨハネ福音書のプロローグ)こそが、神と人間、人間と自然の対立を克服するための原理として、しかも対立の原理を克服するものとして位置づけられる。
23. 生の弁証法的運動と愛における和解
24. 三段階において進展する生のプロセスは、様々な諸対立を運命的に生み出しつつも愛

における和解・再統合に向けて進展する。→ 精神の弁証法として概念化され一つの哲学体系へともたらされる。→ 体系と生

## 7. キルケゴールとシェリング

### (1) 広義の実存哲学：本質から実存へ＝観念論を超えて

#### 1. ティリッヒ

「今日、実存哲学と呼ばれている特別な哲学の在り方は、ワイマール共和国下のドイツ思想の主流の一つとして現れた。その指導者にはハイデッガーやヤスパスといった人が数えられる。しかし、その歴史は少なくとも一世紀、1840年代まで遡る。その主要な論争はシェリング、キルケゴールそしてマルクスといった思想家による、ヘーゲル学派の支配的なく合理主義>あるいは<汎論理主義>への鋭い批判において定式化されたのであり、次の世代では、ニーチェとディルタイがその提唱者に加わるのである」(Tillich, 1944, 354)。

「広義の実存の哲学」(in a larger sense)：そのもっとも典型的な思想家であるキルケゴール(狭義の実存主義)から、後期シェリング、フォイエルバッハ、マルクス、ニーチェから、さらにはディルタイ、ベルグソンなどの生の哲学やウィリアム・ジェームズのプラグマティズムまでを包括する。

#### 2. 19世紀のドイツ思想史におけるシェリングの位置：本質主義から実存主義へ

シェリングをカント以降のドイツ観念論の文脈に位置づけると共に、とくに後期シェリングの思想をヘーゲル的な本質主義に対する批判としての実存主義の起点と捉えている。

#### 3. 実存主義：人間の現実や実在を本質存在から区別された「実存」(現実存在) —この実存の内容をどう理解するのか、つまり実存の基本的メルクマールを何にするかについては様々な立場が存在する—として規定し、人間存在の生きた現実を合理的に把握可能な諸本質とそれらからなる論理学の体系とから演繹することはできないとする思想的立場。

本質主義：論理体系において合理的に演繹される諸本質から人間を理解する立場(ヘーゲルに典型的に見られる汎論理主義)。哲学思想に広く見られる主要な思想的動向。波多野ならば、合理主義。

### (1) シェリング(1775-1854)

#### 4. 本質主義(ヘーゲル)と実存哲学(後期シェリング→キルケゴール)の関係

→ シェリングの言う消極哲学と積極哲学の関係。

#### 5. しかし、ヘーゲルとシェリングの関係は決して単純ではない。

「ヘーゲルの死後長い間、彼はヘーゲルの最大の批判者であった。……しかし、シェリングはヘーゲルと自らが行ったこと(同一哲学)を廃棄しなかった。彼は本質の哲学を保持した。これに対して、彼は実存の哲学を対置した。実存主義はそれ自身の足で立つことのできる哲学ではない。それは常に、現実の本質構造のヴィジョンに基づいている。……この意味でそれは本質主義に基づくのであり、それなしには生きられないのである。……シェリングの後期においては、実存主義に主要な強調点が置かれていた。しかしながら、本質主義は展開されなかったものの、その前提とされていたのである」(Tillich, 1962/63, 438)。

#### 6. 前期の「同一哲学・消極哲学」から後期の「哲学的経験論・積極哲学」への変化(発展)と、両者の相補性。

#### 7. 中期シェリング：『人間敵自由の本質』(岩波文庫)

・「真の対立が、すなわち必然性と自由の対立」(15)、「人間をその自由とともに神的存在者そのものの内に救い上げ、人間は神の外にあるのではなくして神の内にあるのであり、

彼の働きそのものも神の生の一つとしてその生に属する」(26)

「自然哲学」「実存する限りの存在者(das Wesen, sofern es existiert)と単に実存の根底である限りにおける存在者 (das Wesen, sofern es bloss Grunde von Existenz ist) との間の区別」(58)、「神はその実存の根底を自己自身のうちに有しておらねばならぬ」、「神の実存の根底」「神のうちなる自然」「重力」「暗い根底」(59)

「憧憬」「欲望」「予感する意志」(61)、「憧憬の言葉」「悟性」

「諸力の中心点として成立する生きた紐帯の方は霊魂である」(66)

↓

第一の原理：自然、暗い原理

第二の原理：発言された言葉、悟性、光の原理

第三の原理：霊魂、精神（両原理の生きた同一性）

・悪の可能性：両原理の分裂可能性。人間を神より分かつ原理としての我性。「我性は光より分離することができる」(71)

・悪の現実性：「必然的な紐帯ではなくして自由な紐帯」「悪への促し」「誘惑」(87)

「激発」「自由、精神、我意」の「共働」(91)、「被造物の非合理的な或いは闇の原理の激発」「現動化された我性(aktivierte Selbstheit)」(92)。

8. 中期における三重のポテンツ論は積極哲学・後期においても反復される。

問題とされているのは、存在するもの(das Seiende)が思惟に先立って現に存在しているということを論理の問い(消極哲学)として、いかに分析するのかということであり、具体的にはそのために次の三重の原理が取り出される。なお、この論理構造は人間存在においても神的存在においても同型であり(『自由論』の場合と同じ)、したがって、精神的存在者であるためには、神も人間のその存在は三重のもの——主観、客観、精神(主観—客観)の三つのポテンツ——として措定されねばならない。

① 可能的存在(das Sein-Könnende)

② 必然的存在(das Sein-Mussende)

③ 当為的存在 (das Sein-Sollende)

## <参考文献>

0. 『シェリング著作集・全5巻』燈影舎。『人間的自由の本質』岩波文庫。

1. ティリッヒ

1944: Existential Philosophy, in: MW.1

1955: Schelling und die Anfänge des existenzialistischen Protestes, in: MW.1

1962/63: Perspectives on 19th and 20th Century protestant Theology, in: A History of Christian Thought (Ed. by Carl E. Braaten), Simon and Schuster 1972, pp.297-541

1963: Systematic Theology vol.3, The University of Chicago Press

2. 日本シェリング協会『シェリング年報』晃洋書房。

3. 橋本崇『偶然性と神話 後期シェリングの現実性の形而上学』東海大学出版会。

4. 諸岡道比古『人間における悪 カントシェリングをめぐって』東北大学出版会。

5. 松山寿一・加國尚志編『シェリング自然哲学への誘い』晃洋書房。

6. 松山寿一『人間と悪 処女作『悪の起源論』を読む』年、『人間と自然 シェリング自然哲学を理解するために』、『知と無知 ヘーゲル、シェリング、西田』萌書房。

7. 平尾昌宏『哲学するための哲学入門 シェリング『自由論』を読む』萌書房。

8. H. J. ザントキューラー『シェリング哲学 入門と研究の手引き』昭和堂。

## (2) キルケゴール (1813-1855)

1. キルケゴールの思想的特徴

① 宗教批判者としてのキルケゴール

真のキリスト教と、近代市民社会において墮落したキリスト教

→ バルト(啓示と宗教との区別)

②反ヘーゲル主義 → 実存主義の先駆者

真理：客観性としての真理／主体性としての真理

体系：論理学の体系は可能である(諸イデアの相互関係)／しかし、歴史的な現実存在(=実存)に関わる事柄についての体系は、人間には不可能である

同時代性と同時性：信仰はキリストと信仰者とが同時に立つことによって可能になる。主体的真理として、無限の情熱の対象として、決断的に関わること。

ベルリン大学で後期シェリングの講義を聴講。

③仮名と実名の二種類の著作 → 思想の表現形式、レトリックに注目

仮名の意味：1. 小説あるいはフィクション性→著作自体に注意を集中(詩的機能)

2. 一人の思想家の思想が、複数の仮名へと分散する。思想の断片性

「私自身は、ヨハネス・クリマクスよりは高いところにいるが、アンティ・クリマクスよりは低い地点にいる」、『死に至る病』副題：教化と覚醒を目的とする(=建徳的)

ヨハネス・クリマクス『哲学的断片』『非学問的後書き』

アンチ・クリマクス『死に至る病』『キリスト教の修練』

2. キルケゴールの宗教批判=現代批判と市民社会のキリスト教

①「コルサール事件」(1846年)、週刊新聞『コルサール』(ゴシップ暴露)

②キルケゴールの現代批判(『文学評論』の第2章)

・革命の時代と分別の時代(反省の時代、情熱のない時代)

水平化と外面性 → 新聞などのマスコミと世論・公衆といったもの

・宗教的信仰：個々人の救いの問題、個人ひとりひとりの事柄

宗教者にとってきびしい試練、修養 → 「良き戦い」として人生

・沈黙、無関心を装った教会 → 非人間的大衆化社会を批判し真のキリスト教を守るべき使命をもつ教会(戦闘の教会、ecclesia militans)という任務の放棄

3. 単独者の思想

「キリスト教的な英雄的精神とは、人間がまったく彼自身であろうとあえてすること、ひとりの個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、一かかる巨大な努力をひとりでなし、またかかる巨大な責任を一人で担いながら、神の前にただひとり立つことである」 → 単独者 → ルター信仰

4. 不安(『不安の概念』岩波文庫、1844)

「不安は原罪の前提であり、同時にそれは原罪をその根源の方向に遡って解明するものである、ということ」(37)、「無垢は無知である。無垢においては人間は精神として規定せられているのではなしに、おのが自然性との直接的な統一において質的に規定せられている。精神は人間のなかで夢見ている」(65-66)、「不安とは夢見る精神の規定であり、それ故にそれは心理学の領域に属している」、「ほのめかされた無」、「可能性」(66)、「なりうるという不安な可能性」(72)

「いまや墮罪が出現する。墮罪は質的な飛躍なのであるから、心理学はこれを説明することはできない」(78)

「或る論理学の体系のなかでは、可能性は現実性に移行する、とまことに呑気に語られている。だが現実にはそう簡単にはいかない。そこには中間規定が必要とされる。この中間規定が不安なのである、— 不安は質的な飛躍を説明するのでもなければ、それを倫理的に弁護するのでもない。」(80)

5. 絶望(『死に至る病』岩波文庫、1849)

「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関

係が自己自身に関係するものになることが含まれている、— それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。人間は有限性と無限性との、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然性との、総合である。総合とは二つのものの関係である。しかしこう考えただけでは、人間はいまだなんらの自己でもない。」(20頁)、「関係がそれ自身に対して関係するということになれば、この関係こそ積極的な第三者なのであり、そしてこれが自己なのである。」(21)

「絶望とは自己自身に関係する関係としての自己(総合)における分裂関係である」、「総合のうちに分裂の可能性が存するのである。」(24)

「絶望とは分裂関係から結果し来るのではなく、自己自身に関係する関係から結果し来るものだからである。そして人間は自分の自己から脱け出ることができないように、自己自身への関係から脱け出ることもしない。」(27)

「自己のうちなるこの病」(29)

6. 「本質／不安」から「実存／絶望」へ：墮罪＝飛躍

7. 人間の自己：自己関係という構造を組み入れた関係的存在

- ・自己反省、自己参照性、自己関係：「……」「自己」に関係する関係」に関係する関係」……」 → 無限に多重化する存在者である(生成過程における自己)
- ・自己＝生成しつつ在る存在者、自己になりつつある存在者 → 本来的な自己になるという課題

・関係存在としての自己の存在根拠

1. 人間は自己自身の中にその存在根拠を有する → 自己組織化  
始まりの問題(宇宙の始まりのその前)と無限遡及のパラドックス
2. 関係存在の措定者を自己ではない他者として考える立場

・人間＝自己関係的存在→自己になる課題→不安と絶望の可能性

8. 実存弁証法と真のキリスト者への道

・精神の発展プロセス：この「プロセス」はいわば範例であり、言辞油の記述ではない。

「美的段階 → 倫理的段階 → 宗教性A → 宗教性B」

[美的段階]：美的なものが人生の原理あるいは目的になっている生き方

[倫理的段階]：倫理的なものが原理または目的とする生き方

・「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」(マタイ 26:41)。

[宗教性A]：「わたしは特定の宗教は信じないが、神や霊の存在は信じる」

[宗教性B]：同時性あるいは絶対的逆説性

(キリストにおける罪の贖罪を信じる)

## <参考文献>

0. 『キルケゴール著作集』白水社。

『キルケゴール著作全集(原典訳記念版・全15巻)』創言社。

1. キルケゴール『不安の概念』『死に至る病』岩波文庫。

2. 武藤一雄『キルケゴール』創文社。

3. 小川圭治『キルケゴール』講談社。

4. ディーム『キルケゴールの実存弁証法』創言社。

5. マッキノン他『キルケゴール—新しい解釈の試み—』昭和堂。

6. 稲村秀一『キルケゴールの人間学』番紅花舎。

7. 日本キルケゴール研究センター刊行、松木真一編『キルケゴールとキリスト教神学の展望——<人間が壊れる>時代の中で』創言社。

8. 須藤孝也『キルケゴールと「キリスト教界」』関西学院大学出版会。

9. 橋本淳『セーレン・キルケゴール 北ツェランの旅——「真理とは何か」』創元社。